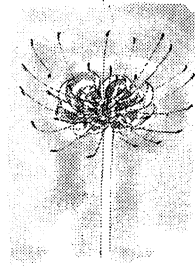


唯  
識平  
川  
彰

唯識とは、われわれが「外界である」と思っているものは、心の現わし出したものであるという意味です。これは、解深密教げじんみつぎょうに「識の所縁は、唯識の所現であるが故に」という教説で示されています。「三界は虚妄にして、但だ是れ一心の作なり」ということは、十地経に説かれていて、  
 「唯心」ということは、「唯識」と意味は同じでして、大乘佛教では古くから認められていた思想であります。そしてこの考えは、さかのぼれば原始佛教にも見られる思想

です。

唯識ということが、佛教でどうして発見されたかといいますと、これは坐禅の実践に関係があります。坐禅の修行におきまして、熱心な人は、朝から晩まで禅定に入っています。そして深い瞑想にはいつていますと、外界にたいする関心がなくなりまして、夢を見ている時と同じように、心の中だけの認識になります。そういう瞑想の世界で「佛を見る」等の不思議な体験がおこります。これが観佛三昧

です。しかし瞑想の中で見られた佛陀が、そのまま外界にあるとは考えられませんから、いま心で見ている佛陀は、心自身が現わし出したものであると知るのです。そして覚醒時の認識も、基本的にはこれと変りないことを洞察するのです。

例えば友人の下宿を訪ねたら、友人は蒲団の中で寝ていたとします。そして火鉢にはお湯が沸いており、お茶菓子もあるとします。そこでその人はお茶を入れて、お菓子を食べて、友人が目をさますのを待っていました。しかしいつまでたっても目をさまさないで、「起きよ」と言っても手を引張ったら、その手は冷たかったというのです。つまり眠っていると思った友人は、死んでいたのです。しかしそれが死人だとわかると、部屋全体が気味悪いものに変ってしまいます。そして食べたお菓子も気持が悪くなるでしょう。

つまり眠っている人か、死んでいる人かは、目で見ただけでは分らないのです。しかし私共は、目で見ただけで外界のものを判断しがちです。

或いは次のような例もあります。例えばホテルで研究会を開いている時、机の上に本やノートをひろげて、勉強をします。しかし昼になってボーイがやってきて、机に白い

布をかぶせて、その上に食器を並べたら、それは食卓であるわけです、したがってそこに「机」という固定的なものがあるわけではないのです。人間の心が、それを机であると認識し、或いは食卓であると構想するのです。つまり勉強をすれば机ですが、食事をすれば食卓であるのです。故に机であるか、食卓であるかは、目で見てきめるのではなく、心で判断してきめるのです。

このように外界は、目で見てきめられるのではなく、心で判断してきめられるので、外界は心で作り上げたものであるということです。しかも心で考えることは、ひとそれぞれに異なっていますから、われわれの外界の受けとめ方も、人によって違いがあるのです。したがって、他人も自分と同じものを見ていると考えると、相互の間に誤解がおこります。唯識の教理は、まずこの点に注意を喚起しているのです。

唯識説で、外界は心の現わし出したものであるといいますが、外界が無いというわけではありません。しかし何があっても、心で認識しなければ有るとは言えません。自分の衣の襟えりに高価な宝石が縫いこめられていても、それを知らなければ、無いのと同じです。ものが有るから認識され

るといいますが、実際には、認識されるからものが有るのです。しかも外界を認識するとき、外界を材料にして心が外界を作り上げているのです。そして私たちは、心が作り上げた外界を認識しているのです。それ故、心が作り上げる以前の外界は知りようがないのです。

例えば雨のあとに、天空に美しい虹が出たとします。私共はそこに七色の色があると思いますが、しかしそれは光の屈折で色が現れているにすぎないのです。大空に赤や黄・紫などの色素があるわけではないのです。赤色の色素でも赤色が見えますが、光の屈折だけでも赤色は見えるのです。あるいは小鳥のさえずりが聞こえる人には、姿は見えなくとも小鳥が近くにいます。しかし耳が遠くて小鳥の鳴きこえが聞こえない人には、小鳥がいるかいないかを論議しようがないわけです。このように聴力の良い人と、悪い人とは、音の世界がすっかり違ってしまいます。同様に視力の弱くなった老人には見えない物も、若い人にははっきり見えるでしょう。しかし私共は、自分の見えるものが、そのまま外界にあると思っています。

このように私共の見ている世界は、人それぞれに異っています。その理由は、私共の外界を認識する力が、人それ

ぞれに違っているからです。われわれの心の奥には阿頼耶識あらいやがありまして、外界を認識する力はすべてここから出てくるのですが、この阿頼耶識が人によってそれぞれ異なるからです。

阿頼耶識は、心の無意識の領域にあります。ここに遣伝や記憶、性格、過去の業力ごうりき等の諸力をたくわえて、それらを統一して活動しているのが阿頼耶識です。阿頼耶識は心の無意識の領域にありますから、われわれにはその存在は分かりませんが、しかし失われた記憶が突然意識の表面に現れたりしますと、それが無意識の領域から出てきたと考えざるを得ないわけですから、無意識の領域に過去の経験が保存されていることを認めざるを得ないと思います。それが阿頼耶識です。阿頼耶(alayā)とは「貯える」という意味でして、「蔵識」と訳されています。

阿頼耶識は自己の心理活動と生命活動とを併せて統括する人格的主体です。阿頼耶識を認識する第二の阿頼耶識はありませんから、阿頼耶識の存在は認識されないのです。阿頼耶識は二十四時間断絶しないで活動し、血液の循環や消化活動等の生命活動を持続させると共に、表面心の心理活動を推進するものです。表面心が眠っている時でも、阿

頼耶識は目覚めています。この阿頼耶識が肉体を捨てて去る時が個体の死であります。

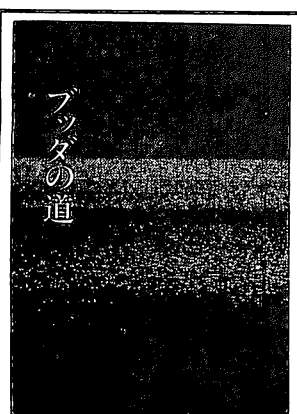
つぎに表面心の活動を見ますと、これは意識の世界をいうのです。心を「一つのもの」と見ることもできますが、それを作用に分けて、分析して理解することもできます。

分析しますと、表面心は七種の識に区別されます。それらは眼識・耳識・鼻識・舌識・身識の「前五識」と、第六の意識、さらに第七の末那識とに分けます。

前五識は感覚的な認識でして、これは五つの領域に分れます。すなわち眼識は視覚のことで、色を見ますが、声をきくことはできません。耳識（聴覚）が声を聞きます。鼻

識は香（におい）を嗅ぎ、舌識は味覚でして、味を知る。身識は触覚のことで、熱い・冷い・堅い・柔い、その他触覚で知る知覚を指します。これらの五つの感覚の領域は、それぞれ分れていまして、眼で音をきいたり、耳でおいをかぐということはできません。それ故、感覚は眼識等の五識に分れるのです。

これらの五識の結果を総合して知るのは、第六の意識です。例えば精巧に作られた金メッキと、純金のものとは、目で見ただけでは区別が付き難いものですが、手でさわったり、重さをくらべたり、舐めてみたりして、それらの結果を第六意識で総合して判断しますと、メッキと純金とでは微妙な違いが出てくるのです。



写真集 好評発売中

## ブツダの道

釈尊の足跡をたどる

二五〇〇年にわたって東洋の心の風土を潤しつづける佛教。今、その源流を尋ねて、智慧と慈悲の人・ブツダに到る。精神のふるさとであるインドの大自然のなかで仰ぎみたブツダのすがたを、清新なカメラアングルと詩と文でつづるブツダへの讃歌——（コマ文庫刊）

撮影 丸山 勇

詩 二橋すすむ  
文 内藤喜八郎

A 4判 上製 58頁

¥3,090（税込）送料310

在家佛教協会

東京都千代田区大手町1-6-1

郵便番号100

電話03-3214-5024 振替東京0-17765

西洋思想で「意識」(consciousness)という場合には、前五識の感覺的認識をもふくめて、六識すべての内容を指すようですが、唯識佛教では、作用の違いによって識を区別しますので、前五識の感覺を除いて意識を立てます。故に意識の範囲がせまくなります。

六識のうち、前五識は感覺ですから、現在の対象だけを認識します。過去や未来の存在は認識の対象になりません。例えば昨日経験した火傷の熱さは、身識で思いおこすのではなくして、意識で思いおこします。意識で思い出した熱さが、どれほど熱くても、二度火傷をすることはないからです。一度過去に経験したものは、五識で再び経験することはありません。例えば「結婚しましょう」と言っても、その言葉はすぐ消えて無くなりません。しかしその言葉の力は無になるのではないのでして、言葉としては滅しますが、滅するときに「種子」に形を変えて、阿頼耶識に植えつけられて保存されます。これは言葉だけでなく、色や香、味、觸覚の対象等もすべて同じでして、阿頼耶識から生じて来て、五識の対象となり、刹那に滅して、再び阿頼耶識に保存されるのです。

眼で物を見ることは嬰兒でも行いますが、しかし言葉で

対象を知るではありません。対象に言葉を適用し、意味づけて理解するのは、第六の意識の作用です。意識は過去や未来の存在を対象として認識し、さらに善悪の判断をします。前五識の感覺は、善とか悪とか言えないものですが、それに善悪の意味づけをするのは、第六意識です。例えば同じ言葉でも、虚言として語れば悪になるのです。それから第六意識には自我意識があり、自我にたいする執著をおこします。

しかしわれわれには意識の奥に、さらに末那識がありまして、無意識的に自我意識をおこしています。これを俱生の我執といいます。末那識は阿頼耶識を対象として、それを自己の自我であると誤解するのです。

私共が「こころ」と言っているものは、この表面心を指すのでして、それは感覺の前五識と、第六の意識、第七の末那識の七識から成立しています。これらの識の活動は、すべて阿頼耶識から生じて、再び阿頼耶識にかえるのです。しかし表面心は善悪や欲望・怒り、その他の心理作用によって変質しますから、阿頼耶識から生ずる時と、それが再び阿頼耶識にかえる時とは、その内容が変っているのです。